

怖い絵本を楽しむことの発達

—1～3 歳児クラスにおける絵本の読み聞かせ場面の分析を通して—

富田 昌平*・福島菜津子**

Development of enjoying scary picture books

—Analysis of picture book reading scenes in classes for 1-3 year olds—

Shohei TOMITA and Natsuko FUKUSHIMA

要 旨

本研究では、子どもはいつ頃から怖い絵本の怖さに気づき、それを楽しめるようになるのかについて検討した。1, 2, 3 歳児クラスの子どもたちに怖い絵本を集团的に読み聞かせ、そこで観測された 1 人ひとりの子どもの反応を絵本の場面ごとにポジティブ（微笑む、笑い声をあげる、絵本と関連した発言をするなど）、ネガティブ（「怖い」「いやだ」などと言う、顔を背ける、目や耳をふさぐなど）、ニュートラル（集中して見ているがポジティブもしくはネガティブに偏った表出はなし）のいずれかに分類した。分析の結果、2 歳半頃までの子どもの多くは怖い絵本の怖さに気づかず、あまり反応も見られないが、2 歳半を過ぎた頃から怖さに気づいて怖がるようになるとともに、その先にある幸福感を求めて楽しめるようになることが示された。また、怖い絵本を楽しめるかどうかは絵本の新奇性によっても異なることが示された。

キーワード：恐怖、楽しさ、絵本、集団読み聞かせ場面、幼児

問題と目的

子どもは怖い絵本が大好きである。それを読み聞かせると、怖がって必死に避けようとするそぶりを見せながらも、読み終わると決まって「怖いのをまた読んで！」と求める姿が見られる。絵本に限らず、遊びの中でも子どもはしばしば怖い状況を自ら作り出し、友達同士で怖がったり怖がらせ合ったりなど、積極的に怖さを楽しもうとする。

恐怖とは、人間を危険から遠ざけるために進化した感情である (Dozier, 1998/1999) とされる。それは不快な感情であり、身体的ないし心理的にひどい苦痛や危害を受けそうなときに呼び起され、実際の苦痛や危害に先立って経験されることで人間は危険を早めに察知して、それを回避することができる (Ekman & Friesen, 1975/1987) のだという。

では、なぜネガティブな感情であるはずの恐怖を子ども (もちろん、大人もそうであるが) はあえて経験し

ようとするのであろうか。Ekman & Friesen (1975/1987) によると、人間が恐怖をあえて経験しようとするのは、そこに幸福感が伴うからだという。恐怖の対象である脅威に出会った時、人はそれを回避しようとするが、同時に言い知れぬスリルを感じる。そして無事に回避することができる、今度はどうにか峠を越えることができたという認識から幸福感がどっと押し寄せる。こうしたスリルとその先にある幸福感を求めて、人は恐怖をあえて繰り返し経験したがるようになるのだという。また、Bloom (2010/2012) は、人が怖いものをあえて見たがるのは、それがあくまでも見かけや想像に過ぎず、本物でも現実でもないことを認識できているからだ指摘している。虚構の安全性を認識できているからこそ、人は安全な距離で、安全な環境から、それを楽しむことができるのだ。

確かに、怖い絵本を読んでもらっているときの子どもの様子を振り返ってみると、彼らはそれぞれに声を潜めたり、目や耳をふさいだり、体をのけぞらせたり、

* 三重大学教育学部

** 津市立保育園

保育者の背中後ろに隠れたり、「こわいこわい」「うわー」「きゃー」と言ったりする。しかし、そうしながらもハラハラドキドキの怖い感じを楽しんでいるようであるし、読み終わったら読み終わったで、互いに顔を見合わせてほっとした表情を見せたり、急に笑い出したり、普段以上に多弁になったりして、幸福感を味わっているようにも見える。そしてその後、決まって「もっかい読んで！」とリクエストしてくる。子どもにとって怖い絵本は確かに怖さを感じさせるものではあるが、それらはいくまでも紙の上に描かれた見かけ上の怖さであり、本物の怖さではないという安心感もあるのかもしれない。

怖い絵本をあえて何度も読んで欲しがるとその行為の背景にある子どもの心理はそのように説明できるとして、では、いったい子どもはいつ頃から怖い絵本を楽しめるようになるのであろうか。この点を考えるうえで参考になる先行研究はそう多くないが、いくつか存在する。例えば、Jersild (1968/1974) は、子どもの恐怖対象が2歳から3歳頃にかけて、それまでは大きな音や騒がしい音、見知らぬもの・人・場所、高いところ、急に動かされること、痛みなど、現実的なものが中心であったのに対して、それ以降は想像のもの、空想的なもの、暗闇、一人でいることなど、想像的なものが中心へと発達的に変化することを明らかにしている（同様の結果は最近の富田 (2017) の研究でも支持）。

さらに富田 (2016) は、2歳児クラスの1年間の保育日誌を分析資料とし、その中から「こわい」「おぼけ」「おに」「オオカミ」などの用語を抽出し、想像上の怖いものを楽しむ保育の実践がいつ頃からどのように行われているのかを調査した。その結果、そうした遊びは全250日中80日分の日誌(32%)で確認され、2歳児クラスの4月の時点ですでに、例えば、園舎の裏側や他のクラスの部屋へと探険に出掛け、「なんか怪しくない?」「あ!黒い耳みたいなのが見える!」など、保育者による何らかの怖さを誘う声かけをきっかけに行われていることを報告している。

このように先行研究では、2歳から3歳にかけて、子どもの怖がる対象は現実的なものだけでなく想像的なものも含まれるようになり、2歳児クラスの初めの時点ですでに保育の現場では想像上の怖いものを楽しむ遊びが実践されていることが示されている。しかし、これらは怖い絵本を扱ったものではなく、また、子どもはいつ頃から怖いものを楽しめるようになるのかという問いに対して直接的な答えを提供するものではなかった。

そもそも子どもは怖い絵本をいつ頃から「怖い」と感じられるようになるのであろうか。この点に関して、佐々木 (1989) は、わが子を対象とした逸話的な事例に

よって、1歳から2歳の終わりにかけての興味深い発達の变化を報告している（詳細については田代 (2001) を参照）。それによると、佐々木の娘のアヤは、1歳3か月頃から怖い絵本として有名な『ねないこだれだ』（せなけいこ作・絵、福音館書店、1969）を読んでもらうようになり、1歳10か月頃になると、ほとんど全文を覚えるほどに読み込んでいたという。2歳を過ぎると、夜になると「モウオバケノジカン?」と聞いてきたり、時計の「9」を指さして「オバケノジカン」と言ったりするなど、それほど怖がる様子は見られなかった。ところが、2歳10か月になったある日、いつものように読み聞かせをし、主人公のルルちゃんがおぼけに連れられて行く場面になると、「ソレデ、オトーサン、オカーサンドーシタノ?」と尋ねてきたそうである。佐々木が「ルルちゃんが悪いんだからいっしょに行きなさいって」と言い、同様のやりとりを3回ほど繰り返すと、アヤは突然激しく泣き出したのだという。それまでは気づかなかった絵本の中のおぼけの怖さに、突然気づいた瞬間だったと言えるであろう。

一方で、田代 (2001) によると、1歳児クラスの子ども（観察当時1歳11か月～2歳10か月）でも、怖い絵本の中にある「なんだか怖い」雰囲気を感じながらも、それを楽しむことができるという。怖い絵本のもう1つの代表格でもある『かいじゅうたちのいるところ』（モーリス・センダック作・絵、富山房、1975）を田代が読み聞かせたところ、子どもたちは「かいじゅうだよ、こわいねえ」「こわくないよ」「こわいよ」「うーん、こわくてやーねえ」などと言いながら、互いに笑い合いおしゃべりしていたという事例を報告している（ただし、子どもたちが感じ取る「怖さ」は多種多様であり、田代はその微妙な質的違いについても細かく分析し考察している）。

これらの事例は、ともに怖い絵本の怖さに気づくようになるのはいつ頃か、また、その怖さを楽しめるようになるのはいつ頃かという問題に注目している点で興味深い。しかし、両研究には、取り上げた絵本の違いや親子での1対1の読み聞かせか保育園での集団的な読み聞かせかという違いがあり、また、あくまでも逸話的な事例の報告で、組織的に研究がなされたものではないという点で十分ではなかった。

そこで本研究では、1, 2, 3歳児クラスの子どもたちに怖い絵本の集団的な読み聞かせを行い、その様子をビデオカメラに記録し、そこでの子どもたち1人ひとりの反応の分析を通して、子どもが怖い絵本を楽しめるようになるのはいつ頃かを検討する。仮説的には、怖い絵本に対する子どもの反応は、最初は「怖さ」に気づかず、あまり反応が見られない段階から、次に「怖さ」に気づいて「怖がる」ようになる段階、そして、「怖

さ」に気づいたうえで、その先にある幸福感を求めて「楽しめる」ようになる段階へと発達的に変化することが予想される。本研究では、各年齢クラスが概ねどの段階に当てはまるのかという点に主に焦点を当てて考察する。

方法

被調査児

三重県津市内の私立保育園に通う1歳児クラスの幼児8名（男児6名，女児2名；平均年齢2歳1ヵ月；年齢範囲1歳8ヶ月～2歳5ヶ月），2歳児クラスの幼児10名（男児5名，女児5名；平均年齢3歳2ヶ月；年齢範囲2歳7ヶ月～3歳6ヶ月），及び，同じく私立幼稚園に通う3歳児クラスの幼児22名（男児13名，女児9名；平均年齢4歳0か月；年齢範囲3歳8ヶ月～4歳7ヶ月）が対象であった。

材料

読み聞かせ用の絵本には、怖い絵本2冊と怖くない絵本1冊を使用した。怖い絵本の1冊目には、『ねないこだれだ』（せなけいこ作・絵，福音館書店，1969）を選択した。選択理由としては、①「子どものころに怖かった絵本ランキング」（「母の友」編集部，2013）でも第2位に選ばれているように、低年齢児向けの怖い絵本として広く知られていること、②佐々木（1989）や田代（2001）の著書でも実践事例が紹介されており、それらの先行研究との比較が可能であること、③1歳児でも最後まで絵本に集中できるページ数や文章量であることが挙げられる。

怖い絵本の2冊目には、『おばけだじょ』（tupera tupera作・絵，学研，2015）を選択した。怖い絵本の知名度を考えると、同ランキングの第1位『おしいれのぼうけん』（古田足日・作，田畑精一・絵，童心社，1974）や第3位『モチモチの木』（斎藤隆介・作，滝平二郎・絵，岩崎書店，1971）などが候補に挙がるが、これらはいずれも低年齢児向けではなく、ページ数や文章量も多いことから除外した。最終的には、①『ねないこだれだ』とほぼ同じページ数と文章量であること、②内容が低年齢児向けであることを理由に、この絵本を選択した。また、『ねないこだれだ』が子どもにとって馴染みがあり、読書経験が多いと予想されるのに対して、『おばけだじょ』はあまり馴染みがなく、読書経験も少ないと予想されることから、絵本の新奇性という点でも比較の対象となりうると考えた。

最後に、怖くない絵本には、『ぴんぼーん』（山岡ひかる作・絵，アリス館，2011）を選択した。この種の絵本は、怖い絵本を読む前に子どもをリラックスさせる、あるいは、各年齢での絵本の読み聞かせ場面における

ベースラインを把握するうえでも必要であった。①『ねないこだれだ』とほぼ同じページ数と文章量であること、②内容的にも低年齢児向けであることを理由に選択した。

手続き

絵本の読み聞かせは第2著者が行った。第2著者は調査時点で幼稚園教諭免許と保育士資格の取得に必要な実習をすべて終えており、乳幼児期の子どもとかわることに慣れていた。また、調査協力園には過去2年間保育補助のアルバイトで通っており、子どもたちとも顔馴染みであった。それでも本調査は子どもに怖い絵本を読み聞かせるという内容であることから、事前に十分にラポールを形成した上で実施した。

絵本の読み聞かせは、子どもたちが普段生活している保育室で行われた。1，2歳児は2列にイスを並べ、3歳児は人数が多いため3列にイスを並べて座った。子どもたち全員の顔がビデオカメラに収まるように、適度に間隔を空けて着席してもらったが、1歳児では後方に座っていた1名が前方の子どもと重なり、ビデオカメラに十分に収まっていなかったため、この1名はデータ分析から除外した（最終的に先述の8名が分析対象）。また、調査実施当時は新型コロナウイルスが猛威を振るっていた時期であり、そのため1，2歳児は着用していなかったが、3歳児は全員マスクを着用していた。従って、以下の子どもの反応分析では、1，2歳児と比べて3歳児は顔の表情が判定しにくく、結果的にポジティブな反応が実際よりも低く見積もられた可能性は否定できない。よって、この点に関しては慎重に扱う必要がある。

読み聞かせは常に『ぴんぼーん』、『ねないこだれだ』、『おばけだじょ』の順序で行った。これは最初に怖くない絵本を読み、次に怖い馴染みのある絵本を読み、最後に怖くて馴染みもあまりない絵本を読むことによって、怖さが急激に訪れないように配慮したものである。読み聞かせの時間帯は、朝の会終了後の9時半から10時頃の時間帯に20分程度の時間を目安に行った。最初にリラックスした雰囲気ですし子どもたちとおしゃべりをした後、読み聞かせを開始した。絵本の読み聞かせが終わると1冊ごとに、感想や怖かった・面白かった場面などを簡単に尋ねた。こうしたやりとりを通して、子どもが過度に怖さを感じていないかどうかを確認し、確認された場合には適宜フォローをするように努めた。また、3冊すべての読み聞かせが終わると、3冊の絵本のうちどれが最もお気に入りであると感じたかについてクラス全体に尋ねた。読み聞かせ中の様子はすべてビデオカメラで撮影し、記録した。

なお、本調査は行うにあたって事前に園長、担任教諭に調査内容を説明し協力を求め、了承を得たうえで

Table 1-1 絵本『びんぼーん』の場面ごとの絵と文章

場面	絵	文章
表紙／中表紙	顔の描かれた呼び鈴／呼び鈴とドア	『びんぼーん』
1.男の子	男の子がドアから出てくる	「はーい」
2.びんぼーん	穴の開いた木	「ここはだれのおうちかな? びんぼーん」
3.りす	りすが出てくる	「はーいはーいはーい ここはりすさんのおうち」
4.びんぼーん	草原に白い柵	「ここはだれのおうちかな? びんぼーん」
5.うま	うまが出てくる	「ひひーん おうまさんのおうち」
6.びんぼーん	蓮	「ここはだれのおうちかな? びんぼーん」
7.かえる	かえるが出てくる	「けろけろけろろ かえるさんのおうち」
8.びんぼーん	藁	「ここはだれのおうちかな? びんぼーん」
9.あひる	あひるとひよこが出てくる	「がーがー びよびよびよ あひるさんのおうち」
10.びんぼーん	あじさい	「ここはだれのおうちかな? びんぼーん」
11.あれれ	あじさい (場面10と同じ)	「あれれ?おるすですか? びんぼーん びんぼーん」
12.かたつむり	かたつむりが出てくる	「おまたせー! かたつむりさんのおうちでした」
背表紙	表紙の呼び鈴が笑っている	なし

Table 1-2 絵本『ねないこだれだ』の場面ごとの絵と文章

場面	絵	文章
表紙／中表紙	黄色い目に赤い口の白いおばけ ／ふくろう	『ねないこだれだ』
1.時計	振り子時計	「とけいながります ボン ボン ボン…」
2.目	黒い背景に緑と黄色の目	「こんなじかんに おきてるのはだれだ?」
3.ふくろう	茶色のふくろうと黒色のみみずく	「ふくろうにみみずく」
4.くろねこ	黒猫	「くろねこ ぞらねこ」
5.ねずみ	ねずみ	「いたずらねずみ」
6.どろぼう	泥棒	「それともどろぼう…」
7.おばけ	指さしをするおばけ	「いえいえ よなかはおばけのじかん」
8.女の子	ぬいぐるみを持った女の子	「あれ あれ あれれ…」
9.おばけにおなり	おばけ (表紙と同じ)	「よなかにあそぶこは おばけにおなり」
10.とんでいけ	女の子がおばけに変身し、おばけに手を引かれていく	「おばけのせかいへ とんでいけ」
11.シルエット	おばけとおばけになった女の子が、夜空を飛んでいくシルエット	「おばけになって とんでいけ」
背表紙	場面11の背景が緑に	なし

実施した。先に述べたように、子どもが過度に怖さを感じないように、調査の内容や手順等に十分配慮した。統計処理には SPSS を使用した。

調査実施時期

2021年11月の3日間。

結果と考察

分析方法

分析の単位は、絵本の見開き2ページを1場面として、場面ごとに子ども1人一人の反応を分類した。なお、表紙・中表紙と背表紙もそれぞれ1場面として分析対象に含めた。Table 1-1～3は、各絵本の場面ごとの絵と文章の内容を示したものである。このように、場面の数も文章の量もほぼ相違なかった。

子どもの反応は絵本の場面ごとに、①絵本への興味(あり、なし)、②表情・言動の志向性(ポジティブ、ネガティブ、ニュートラル)という2点に焦点を当て

て分類した。分類の基準や具体例については後述する。

絵本への興味

子どもが絵本の読み聞かせそのものに興味を持つことができていたかどうかを探った。同じように集団での絵本の読み聞かせ場面での子どもの反応を分析した小林(1997)を参考に、絵本の場面ごとに子どもの興味のあり・なしを分類した。「興味あり」反応は、視線が絵本に向いている、絵本を指さす、微笑する、笑い声をあげる、驚く、怖がる、体を前に乗り出す、よく見ようとして姿勢を変化させる、絵本と関連する発言をする、絵本の場面を真似するなどである。「興味なし」反応は、手足をもじもじさせて落ち着かない、そばにいる友達と関係のない話をする、席を離れて歩き回る、視線が定まらずにぼーっとする、退屈そうにあくびをする、別の方向を見ているなどである。

Table 2は、絵本に興味を示した子どもの割合を示したものである。3冊41場面のうち、1度でも興味を失ったような様子を示した者は、1歳児2名、2歳児1名、

怖い絵本を楽しむことの発達

Table 1-3 絵本『おばけだじょ』の場面ごとの絵と文章

場面	絵	文章
表紙／中表紙	牙のある黒いおばけ／黒と青の2重丸	なし
1.尾	目としっぽのあるおばけ	「おばけだじょ」
2.歯	おばけが口を開けて牙を見せる	「たべちゃうぞ」
3.手	おばけに手が生える	「ばあっ！」
4.足	おばけに足が生える	「つかまえちゃうぞ」
5.ぐわああ	場面いっぱい口を開けたおばけ	「ぐわああ」
6.おばけ？	おばけの牙と尾が無くなり、緑色になる	「おばけだじょ？」
7.かえる	かえる	「おばけじゃないじょ かえるだじょ」
8.ケロケロ	頬を膨らませたかえる	「ケロケロ ケロケロ」(6回繰り返す)
9.背後	かえるの背後に大きな黒いおばけが登場し、かえるが汗をかく	「おばけだじょ」
10.背後・口	おばけは口を開けて牙を見せ、かえるが逃げる	「たべちゃうじょ」
11.へび	黒いへびがかえるを追いかける	「にげる にげる」
12.池	池に浸かったかえると、通り過ぎて行ったへびの尾	なし
背表紙	場面1のおばけ	なし

Table 2 絵本に興味を示した子どもの割合

	1歳児 (N=8)	2歳児 (N=10)	3歳児 (N=22)
『ぴんぼーん』	97%	100%	98%
『ねないこだれだ』	98%	98%	99%
『おばけだじょ』	97%	100%	100%

3歳児4名のみであった。興味なし反応が多く見られた子どもでも、そうした反応は1歳児で9場面(22%)、2歳児で3場面(7%)、3歳児で3場面(7%)に過ぎず、全体を通して興味を失っていたというわけではなく、大部分で興味を示していた。絵本別に興味なし反応の延べ回数を比較すると、『ぴんぼーん』9回、『ねないこだれだ』9回、『おばけだじょ』4回であり、特に特定の絵本で興味を失いやすいわけでもなかった。席を立て歩き回る子どもは1名もおらず、いずれも97%以上という数値が示すように、子どもたちは総じて絵本によく集中していたと言えよう。

表情・言動の志向性：全体の傾向

子どもが絵本に興味を示していた場合、表情や言動を記録することで、各場面での反応がポジティブ、ネガティブ、ニュートラルのいずれの性質のものであったかを探った。「ポジティブ」反応は、微笑する、笑い声をあげる、驚く、絵本と関連する発言をする、絵本の場面を真似するなど、喜びや楽しさを表情や言動で表した場合である。これらは絵本の世界を遠ざけようとするよりも、むしろ近づこうとする反応であり、その意味でポジティブな反応であると言える。なお、怖いものに対して戦うような素振りや示した場合もこれに含めた。「ネガティブ」反応は、怖がる、嫌がる、手で目や耳をふさぐ、顔をそむける、体をのけぞらせる、身をすくめる、悲鳴を上げる、「怖い」「嫌だ」と言うなど、

恐怖を表情や言動で表した場合である。これらは絵本の世界に近づこうとするよりも、むしろ遠ざけようとする反応であり、その意味でネガティブな反応であると言える。「ニュートラル」反応は、例えば、視線が絵本に向いている、絵本を指さす、体を前に乗り出す、よく見ようとして姿勢を変化させるなど、絵本に興味を示しているものの、表情や言動からそれがポジティブなものかネガティブなものか読み取れなかった場合に該当した。なお、そう多くはないが、反応の一部には、ポジティブ反応とネガティブ反応とが場面の中で同居しているケースも見られた(例えば、怖がる様子を見せた後に安堵の笑みを浮かべる、笑顔で「キヤー」と声を上げる)。この場合、本研究ではただ楽しむではなく、その前提としての怖がる反応の有無が重要であったため、ネガティブ反応を優先し、両方に振り分けるのではなくネガティブ反応として分類した。

Table 3-1~3は、各絵本の場面ごとの子どもの反応の概要を示したものである。これを見ると、1歳児は絵本を真剣に見ているものの、2、3歳児と比べると総じて反応が薄く、場面ごとの変化もあまりないことがわかる。怖い絵本に関しても、顔をしかめたり、身をすくませたり、我慢するかのように服の首元をつかむなど、怖がる様子を見せる子どもはいたものの、「こわい」「いやだ」「うわぁー」などあからさまに声に出して怖がる子どもはほとんど見られなかった。一方で、読み終わったとたんにこらえきれなくなったかのように泣き出す子どもが1名見られ、これは他の年齢では見られない姿であった。

2歳児になると、急に反応が大きく豊かになり、場面ごとの変化もよく見られた。怖い絵本に関しても、「こわい」「いやだ」「うわぁー」と声を上げたり、あからさ

Table 3-1 絵本『びんぼーん』に対する子どもの反応の概要

場面	1歳児クラス	2歳児クラス	3歳児クラス
表紙/中表紙	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。絵本を見て微笑む子もいる。	笑顔で絵本を指さして、「あれー！見たことあるー」と言う子もいる。保育者の真似をして「びんぼーん」と言う子や「誰かな誰かな」と言う子もいる。	呼び鈴を押す保育者の動きを真似する子もいる。
1.男の子	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。	笑いながら「来た来た！」「男の子やった」と言う子がいる。	真剣な表情で絵本に集中している。男の子が出てきたことで微笑む姿も見られる。
2.びんぼーん	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。「ここはだれのおうちかな」というセリフを聞いて首をかしげる子もいる。	笑いながらみんなで「○○（自分の名前）のおうち」と言い合う。	「ここはだれのおうちかな」というセリフに対して「りす」「さる」など口々に答える。
3.りす	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。りすの絵を見て微笑む子もいる。	絵を見て微笑する子や、「りすさん！」「りすさんのおうちでしたー」と言う子がいる。	前頁で「りす」と口にしてた子が、答えが当たっていたため「よっしゃ」と小さくガッツポーズをする。
4.びんぼーん	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。「びんぼーん」と言うセリフを聞いて微笑む子もいる。	誰のおうちだろうかと不思議そうに絵を見る子や、「難しいじゃんか」と口にする子もいる。保育者が言う前に呼び鈴を押す真似をしながら「びんぼーん」と言う子もいる。	「ここはだれのおうちかな」というセリフに対して、「羊」「わんちゃん」などと答えたり、首を傾げたりする。
5.うま	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。	笑いながら「おうまさん」「おうまさんのおうちだった」と言う子もいる。	「おうまさんのおうち」というセリフを繰り返す子もいる。
6.びんぼーん	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。「びんぼーん」と言うセリフを聞いて微笑む子もいる。	「難しい」「かえるさん」と口にしたり、絵本を真剣に見つめる姿がある。	絵を見てすぐに、ほとんどの子が「かえる」と答える。保育者と一緒に「びんぼーん」と言う。
7.かえる	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。絵を見て「かえる」と言ったり、微笑んだりする子もいる。	笑顔で「ケロケロ！」「かえるさん！かえるさん！」と言う子もいる。	答えが合っていて「やった！」とガッツポーズをする子もいる。
8.びんぼーん	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。「びんぼーん」と言うセリフを聞いて微笑む子もいる。	保育者がセリフを言う前に呼び鈴を押す真似をして「びんぼーん」と言う子もいる。	「ここはだれのおうちかな」というセリフに対して「わかんないよ～」「ライオン」と答える。
9.あひる	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。あひるの絵を見て微笑む子もいる。	「あひるさんのおうちだったー！」と両手を挙げて驚いたような反応をとる子もいる。	「がーがー」という鳴き声から「あ！あひる！」と口にする子や、「○○くんわかんなかったよ～」「僕も～」と話す子もいる。
10.びんぼーん	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。「びんぼーん」と言うセリフを聞いて微笑む子もいる。	数人が笑いながら「○○（自分の名前）のおうち」と言う。「びんぼーん」と言って保育者の動きを真似する子もいる。	絵を見てすぐに、ほとんどの子が「かたつむり」と答える。
11.あれれ	不思議そうな表情で絵本を見たり、「びんぼーん」と呼び鈴を繰り返し2回押す保育者の姿を見て、声を出して笑ったりする。	不思議そうに黙って絵を見る。	不思議そうに絵を見る。
12.かたつむり	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。かたつむりの絵を見て微笑む子もいる。	かたつむりの絵を見て微笑んだり、「かたつむりー！」と言う子もいる。	「いーい」と言う子もいる。ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。
背表紙	「おしまい」に対してみんなでお辞儀をする。	「おしまい」に対してみんなで「ありがとうございました」と言う。	「おしまい」に対してみんなで「ありがとうございました」と言う。
読み聞かせ後	真剣な表情で保育者を見る。	T君が「お花にびんぼんしたら、誰も出てい（こ）なかった」と言ったため、保育者が場面11を見せると、他の子たちが「かたつむりー！」「かたつむりのおうち！」と答える姿が見られる。また、場面11の絵を見て「かえるじゃなかった」という子もいる。	かたつむりが1度呼び鈴を押しただけでは出てこなかったことを不思議に思い、「なんで出てこなかったんだろうね」と言う子がいる。また、その子に共感し「なんでー？」と保育者に尋ねる姿も見られる。

Table 3-2 絵本『ねないこだれだ』に対する子どもの反応の概要

場面	1歳児クラス	2歳児クラス	3歳児クラス
表紙/中表紙	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。おばけの絵を見て微笑む子もいる。	「う～わ、怖いよ～」と言い、体をのけぞらせる子や、表紙に書かれたおばけの絵を指さして「これ怖い」と言う子もいる。また、それに対して「かわいいよ」と言う子もいる。	お化けの絵を見て顔をしかめたり、顔を隠して見えないようにする子もいる。また、「怖い」と言って身をすくめる子も数人いる。「もってるー！」と絵本を持っていることを主張する子もいる。
1.時計	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。少し顔をしかめる子もいる。	保育者のセリフを真似て、笑顔で「ぼんぼん」と言う子が数人いる。横を向いて絵本から顔を背ける子や、微笑みながら絵本の方をチラッと見る動きを繰り返す子もいる。一瞬だけ両手で耳をふさぐ子もいる。	下を向いて絵本を見ないようにする子がいる。すると、その子の両隣の子が心配そうに話しかけたり、頭を撫でたりする。
2.目	少し顔をしかめる子もいれば、顔を隠そうとする子もいる。	望遠鏡をのぞくようなポーズをとって、視界を狭めて絵をあまり見ないようにする子もいる。絵本から顔を背けつつも隣の子と笑い合う姿も見られる。「こんなじかんにおきているのはだれだ」というセリフに対して「おばけ」「おばけじゃないよ」と言い合う姿も見られる。	「こんなじかんにおきているのはだれだ」というセリフに対して、絵本を読んだことがある子を中心に「おばけ！」と答える。

怖い絵本を楽しむことの発達

3.ふくろう	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。	少し安心した表情で絵を見ている子もいる。「ふくろう！ふくろう！ホーホーしてるんだって！ホーホー怖い」と言う子もいる。	ふくろうを指さし、「え、これふくろうおぼけだよ！」と言う子がいる。
4.くろねこ	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。楽しそうに「ねこねこねこ！」と言って首を振ったり、顔の前で手を振ったりする。	笑顔で絵本を指さして、「猫ちゃんかわいいね」と言う子もいる。「どらねこ」というセリフを繰り返したり、「ニャー」と猫の鳴き真似をする子もいる。	真剣な表情で絵本を見る。「いたずらねずみ」というセリフを繰り返す子もいる。
5.ねずみ	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。	「いたずらねずみ」というセリフに対して手を叩いて笑い合う姿が見られる。	絵本を持っている子が誇らしげに、「いたずらねずみ」と先にセリフを言う。
6.どろぼう	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。「それとどろぼう？」というセリフに対して首をかしげる子もいる。	笑いながら「あれえ〜」と言う子もいれば、真剣な表情で絵本を見ている子もいる。	絵本を持っている子が誇らしげに、「それとどろぼう」と先にセリフを言う。
7.おばけ	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。	声を出して笑う子や、笑顔で「怖い！」と身をすくめる子もいる。また、少し顔をしかめながら「怖いよ〜」と言ったり、立ち上がって足をバタバタしながら「怖い」と言う子もいる。	真剣な表情で絵本を見る。隣の子と身を寄せ合う。
8.女の子	絵を見ながら「あれっ？」と言う姿が見られる。	「あれっ？」と言いながら笑ったり、絵を指さして「くまちゃんもってる」と言ったりする子もいる。	真剣な表情で絵本を見る。絵本を持っている子が誇らしげに、「あれあれあれれ」と先にセリフを言う。
9.おばけにおなり	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。	声を出して笑う子もいれば、顔をしかめて「怖いよ〜」と何度も言う子もいる。	真剣な表情で絵本を見る子もいれば、少し顔をしかめて身をすくめる子もいる。
10.とんでいけ	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。	女の子がおばけにされた絵を見て「あれっ！あはは！」と笑ったり、笑顔で「う〜わ」と言う子もいる。真剣な表情で絵本を見ている子もいる。	少し顔をしかめている子もいれば、笑顔の子もいる。
11.シルエット	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。少し顔をしかめながらボソッと「怖い」と言う子もいる。	少し怖そうな表情で絵本をじっと見ている子もいれば、少し身をすくめつつ笑っている子もいる。	絵本を持っている子が誇らしげに、「おばけになってとんでいけ」と先にセリフを言う。
背表紙	「おしまい」に対してみんなでお辞儀をする。	「おしまい」に対してみんなで「ありがとうございました」と言う。	「おしまい」に対してみんなで「ありがとうございました」と言う。
読み聞かせ後	真剣な表情で保育者を見る。絵本を振り返っている時に、これまで真剣な表情で絵本をじっと見ていた君がこらえきれなくなったように泣き出す。	1人の子が「ねないこだれだ」に対して「寝た！〇〇（自分の名前）」と言ったのをきっかけに、他の子も口々に「〇〇（自分の名前）も寝た！」と言う姿が見られる。	怖がっていた子が隣の子に「大丈夫？」と声をかけられ、「うん」と頷く様子がある。

Table 3-3 絵本『おばけだじょ』に対する子どもの反応の概要

場面	1歳児クラス	2歳児クラス	3歳児クラス
表紙/中表紙	真剣な表情で絵本をじっと見ている。表紙のおばけを見て微笑んだり、中表紙の絵を見て「まる」と言ったりする姿も見られる。	「ああ！」とすぐに手で目を隠して、絵本から顔を背けたり、「おばけもう読まない！」と言って怖がる子もいる。	表紙のおばけを見て少し微笑む子や、「うわぁ、でっかい！」と言う子、「怖いよ」「〇〇は怖くないけどね」と話す子もいる。
1.尾	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。おばけの絵を見て微笑む子もいる。自分の服の首元を手でつかんでいる子もいる。	絵を指さしながら「おばけじゃないじゃん、おたまじゃくしじゃん」と言う子もいる。「うわぁ！」「隠れろー！」と言って椅子の後ろに隠れる子や、顔を手で覆う子もいる。	絵本を指さして「これ怖い」と言う子や「おたまじゃくしみたい」と言う子がいる。
2.歯	前場面まで微笑んでいた子が急に驚いたような表情になる。自分の服の首元を手でつかんでいる子もいる。	少し顔をしかめながら絵を見ている子や、椅子の後ろに隠れる子もいる。	微笑みながら「キャー」と悲鳴をあげる子がいる。
3.手	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。自分の服の首元を手でつかんでいる子もいる。	椅子の後ろに隠れながらチラッと絵を見て、またすぐに隠れたりする。	1人の子が「パンチ」と言いながら絵本に向かって、パンチを繰り返すと、それをきっかけに数人が笑いながら連続してパンチを繰り返すようになる。
4.足	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。自分の服の首元を手でつかんでいる子もいる。「うう」と言って少し顔をしかめる子もいる。	怖そうな表情でじっと絵本を見つめている子や、椅子の後ろに隠れたり顔を手で覆ったりして絵本を見ないようにしている子もいる。	ほとんどの子は真剣に絵本を見ている。数人はパンチをすることを楽しんでいる。
5.ぐわああ	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。身をすくませながら微笑む子もいる。	「うわぁ」「嫌だー」と言って椅子の後ろに隠れる子がいる。「〇〇く〜ん」と隣にいる子の名前を呼んで、腕をつかもうとする子もいる。	顔を手で隠して絵本を見ないようにする子もいる。首を横に振ったり、身をすくめたりする姿も見られる。
6.おばけ?	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。一瞬身をすくめたが、すぐに元に戻って絵本を指さしながら「かえる」と言う子もいる。	絵を見て「かえる！」と言ったり、立ち上がって「かえるゲロゲロ」と言いながら蛙の真似をする子もいる。	「おばけじゃないよ！」「かえる！」とみんな言う。

7.かえる	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。少し微笑む子もいる。	椅子の後ろに隠れていた子がほっとした表情で絵本を見る。安心してように声を出して笑う子や蛙の真似をする子もいる。	ふふっと笑ったり、「よかった」と安心してする姿が見られる。
8.ケロケロ	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。微笑む子もいる。	かえるの真似をしたり、かえるの絵を見て「しっぽあるー」と言ったりする子がいる。一番怖がって椅子の後ろに隠れていた子が顔をのぞかせて絵本を見る姿も見られる。	笑顔で絵本をじっと見たり、両腕で顔を隠しながらチラッと絵本を見る子の姿が見られる。
9.背後	真剣な表情で絵本を見ていたり、横を向いて絵本から顔を背ける姿が見られる。少し笑いながら「怖い」と口にする子もいる。	「うわぁ」と言って椅子の後ろに隠れる子や、顔を手で覆う子がいる。	おぼけに向かって銃を撃つ真似をする姿や、笑顔で身をすくめたり、顔をしかめて目を隠したりする姿が見られる。
10.背後・口	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。「たべちゃうぞ」というセリフを聞いて驚き、ビクッとする子もいる。	「うわぁやだー!」と言って椅子の後ろに隠れたり、椅子の後ろに隠れながら笑顔で絵本を見たりする姿が見られる。	パンチや銃を撃つ真似をしておぼけに攻撃する姿が見られる。身をすくめつつ、絵本をじっと見ている子もいる。
11.へび	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。	椅子の後ろに隠れつつ顔をのぞかせて絵本を見る子もいる。絵を見て「へび」「へびさん」と言って安心した表情を見せる子もいる。	パンチや銃を撃つ真似をしておぼけに攻撃する姿が見られる。「へび?」「へびだった」と少し安心した表情を見せる子もいる。
12.池	ほとんどの子が真剣な表情で絵本を見ている。	安心した表情で絵をじっと見たり、「良かった」と言って椅子の後ろから出てくる姿が見られる。	ほとんどの子が真剣な表情で絵本をじっと見ている。
背表紙	微笑む子もいる。「おしまい」に対してみんなでお辞儀をする。	おぼけの絵を見てビクッとし怖がる子もいる。	「おしまい」に対してみんなで「ありがとうございます」と言う。
読み聞かせ後	真剣な表情で保育者を見る。絵本を振り返っている時に、これまで真剣な表情で絵本をじっと見ていた君がこらえきれなくなったように泣き出す。	「怖かった〜」と口々に言う。	銃を撃つ真似をしていた子が、もう一度手を銃の形にして構える姿がある。

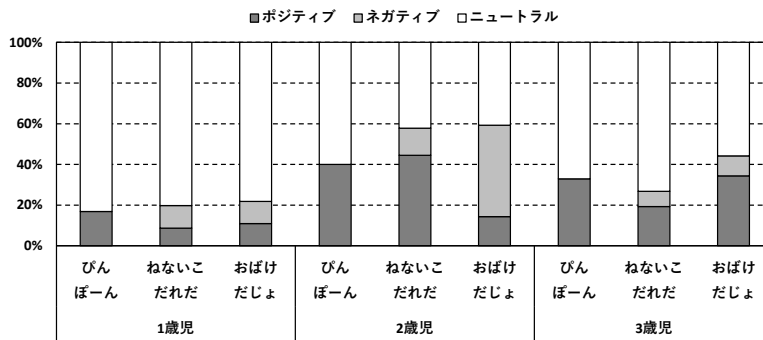


Figure 1 絵本に対する各反応の出現割合

まに顔を背けたり、目や耳をふさいだり、体をのけぞらせたり、身をすくませたりする姿が多く見られた。

一方で、絵本のセリフを繰り返したり、知っていることや思ったことを口に出したり、怖さが過ぎ去った後に笑い合ったりするなど、1歳児と比べるとより怖さに気づき、場合によっては楽しむこともできるようになっているようであった。

3歳児では、2歳児と同様に絵本のセリフを繰り返したり、知っていることや思ったことを言い合ったりする姿はもちろんであるが、絵本でのやりとりをゲームのように捉えて楽しんだり、絵本のセリフを先取りして次々に言ったりするなど、その表出や表現の幅は増え、その程度もより大きなものとなっていた。怖い絵本に関しては、『ねないこだれだ』はもはや彼らにとって馴染みのあり過ぎた絵本の様であり、あまり怖がる様子は見られなかったが、『おぼけだじょ』はまだそうではなく、怖がる様子が見られた。しかし、友達同士

で「怖いね」「怖くないよ」と言い合ったり、笑いながら「きゃー」と声を上げたり、絵本のおぼけに対してパンチを繰り返すなど、2歳児と比べるとより怖さを楽しんでいる様子であった。

Figure 1は、場面ごとの子どもの表情・言動をポジティブ、ネガティブ、ニュートラルのいずれかに分類し、年齢別及び絵本別の核反応の出現割合を示したものである。これを見ると、先ほど述べたような年齢や絵本による違いがよく分かる。子どもごとに各絵本での各反応の出現回数を得点化し、各反応得点を従属変数、年齢を独立変数として絵本ごとに一元配置の分散分析を繰り返し行った。なお、『びんぼーん』ではネガティブ反応がどの年齢でも見られなかったため、この分析のみを除外した。その結果、『ねないこだれだ』ではポジティブ反応とニュートラル反応で年齢による有意な違いが見られた。2歳児は他の年齢よりもポジティブ反応が有意に多く ($F(2, 37)=6.981, p<.003$)、ニュートラル

怖い絵本を楽しむことの発達

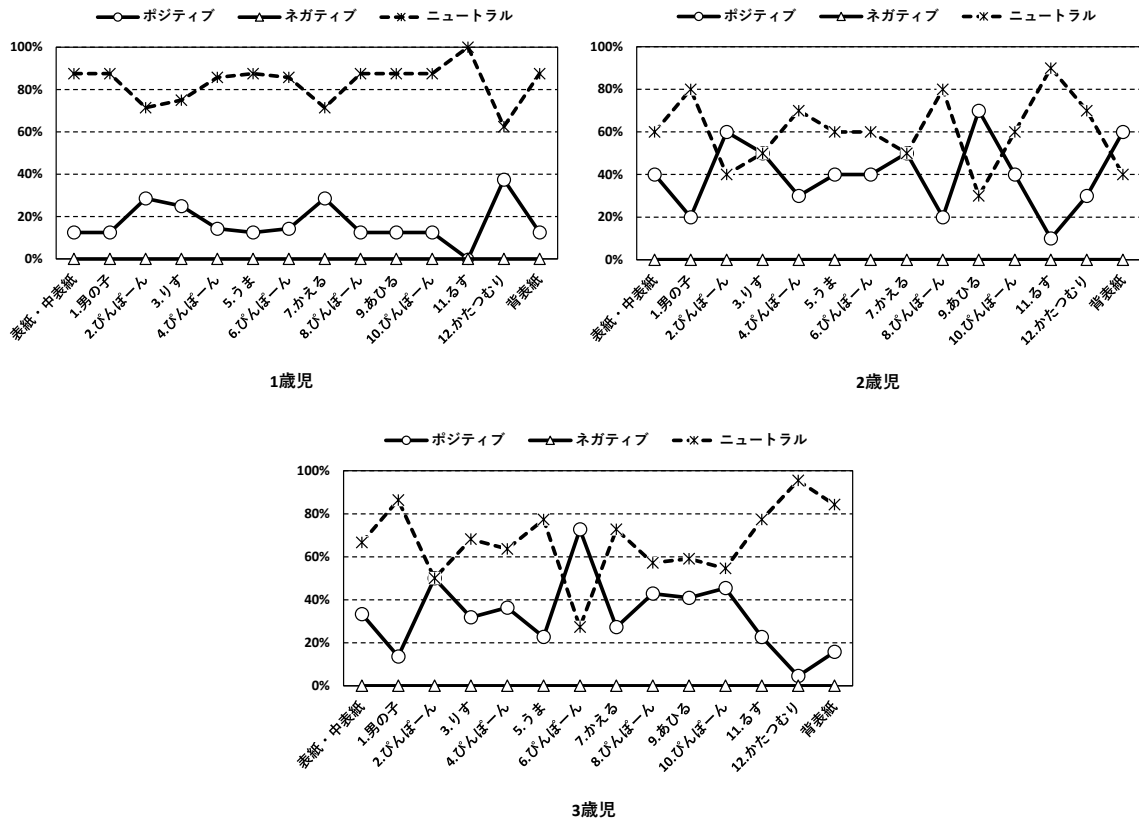


Figure 2 『ぴんぽーん』における各反応の推移

反応が有意に少ないことが示された ($F(2, 37)=6.75, p<.003$)。また、『おばけだじょ』ではネガティブ反応で年齢による有意な違いが見られた。2歳児は他の年齢よりもネガティブ反応が有意に多いことが示された ($F(2, 37)=8.07, p<.001$)。

また、ネガティブ反応は特定の子どものみに多く見られたのかどうか、ネガティブ反応を示す子どもはポジティブ反応を示さなかったのかどうかを探るために、特に怖い絵本2冊に関して、場面全体を通して1度でもネガティブ反応を示した子どもの人数を調べた。その結果、そうした子どもの人数は『ねないこだれだ』で1歳児3名(38%)、2歳児7名(70%)、3歳児10名(45%)、『おばけだじょ』で1歳児4名(50%)、2歳児7名(70%)、3歳児10名(45%)であった。3(年齢)×2(ネガティブ反応の有無)の χ^2 検定を行ったところ、いずれも有意な年齢差は見られなかった。なお、これらの子どもの大部分はポジティブ反応も1度は示しており(『ねないこだれだ』1歳児1名、2歳児7名、3歳児8名;『おばけだじょ』1歳児2名(50%)、2歳児6名、3歳児9名)、怖いながらも楽しさを味わっているようであった。

表情・言動の志向性：場面ごとの変化

これまでの分析では、それぞれの絵本に対する各反応の総量を年齢間で比較したに過ぎず、子どもが絵本

の読み聞かせに参加しながら場面ごとにどのような反応を見せ、それはどのように変化していったかを明らかにするものではなかった。そこで以下では、絵本ごとに読み聞かせの最中における子どもの反応の推移とその年齢ごとの違いについて明らかにする。

まず、ベースラインとなる『ぴんぽーん』に関して、場面ごとの各反応の推移を Figure 2 にまとめた。先に述べたように、この絵本ではネガティブ反応がどの年齢でも全く見られず、ニュートラル反応が多くを占めた。子どもたちは絵本を真剣な表情で見つめて、時おり1人か2人が微笑むくらいで、感情の揺れ動きはほとんど見られなかった。最も大きく揺れたのは場面12で、それまでの展開とは異なり呼び鈴を押しても返事がなく、少し不安に感じさせた後に「なーんだ、やっぱりいたのか」と安心させる場面である。子どもたちの心にこの絵本が確かに響いていることが、この揺れからうかがえる。揺れの少なかった1歳児と比べて、2、3歳児は絵本の物語の進行に合わせて感情が大きく揺れ動いていることがわかる。全体的にはニュートラル反応が多いが、呼び鈴を押した後に期待通りに何らかの動物が出てくる場面が訪れるたびにポジティブ反応は増加していた。「いないいないばあ」の構造とよく似たこの絵本の特徴を、2、3歳の子どもの子どもたちがしっかりとつかんで味わっていることがうかがえる。

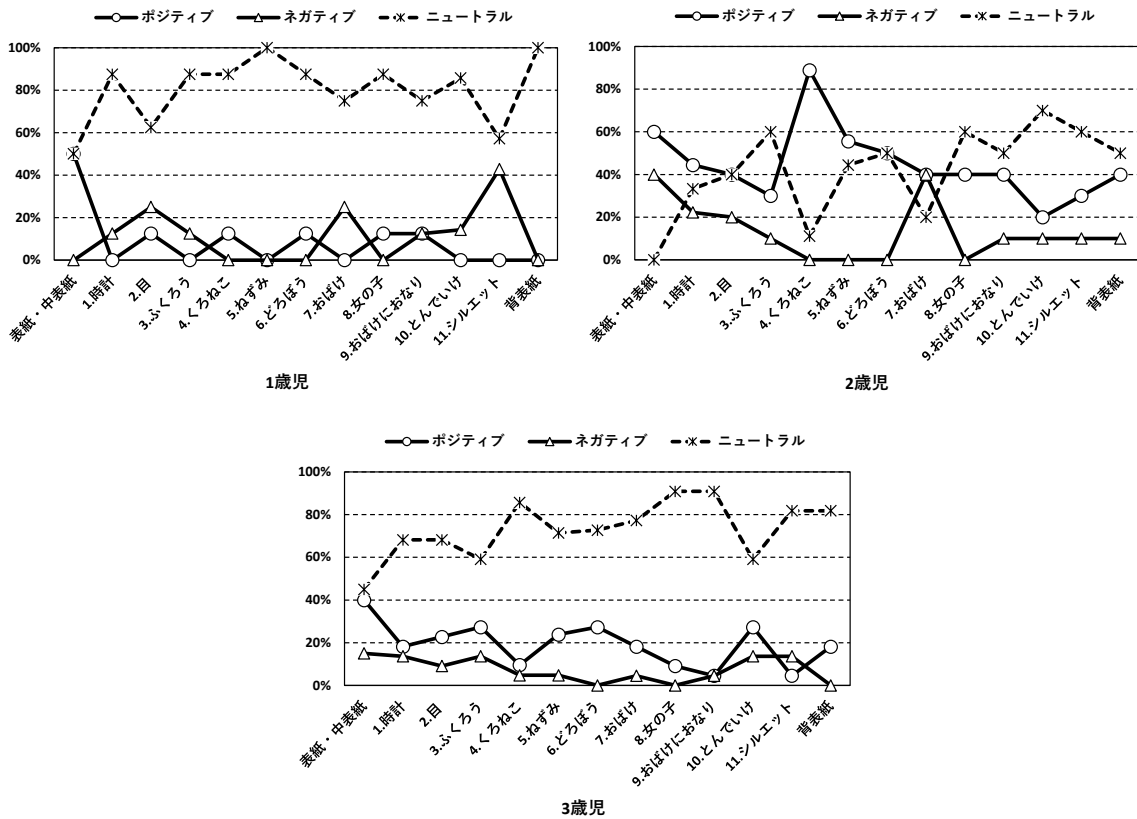


Figure 3 『ねないこだれだ』における各反応の推移

次に、『ねないこだれだ』の場面ごとの各反応の推移を Figure 3 にまとめた。1 歳児では先ほどの絵本と比べてネガティブ反応がわずかに見られるようになった点を除いて、ほとんど似たような推移となった。最も多くのネガティブ反応を示したのは 1 歳 9 か月の J (男児) であり、クラスの中で最も月齢の低い子どもであった。この J は絵本を読み終わった後に泣き出した子どもでもある。一方で、その他にネガティブ反応を示した A (女児) と K (女児) はそれぞれ 2 歳 6 か月と 2 歳 1 か月であり、このように月齢による偏りは特に感じられなかった。2 歳児では感情の揺れ動きが大きく見られた。おばけの表紙を見た瞬間に、子どもたちはポジティブ反応とネガティブ反応のいずれかに大きく分けられたことからわかるように、全員がこの絵本に馴染みがあるけれども、ある子どもにとっては怖くて楽しい絵本であり、ある子どもにとってはただ怖い絵本のようにであった。しかし、最初にあった怖さも場面 4～6 と進行していくとポジティブ反応へと転じており、互いの姿を見合うことができる集団読み聞かせの場の特徴が、子どもの恐怖の克服にとって重要な役割を果たすことをうかがわせる結果と言える。2 歳児にとっては、この絵本は怖さと楽しさの両面を感じさせ、揺れ動きが存分に味わえる絵本のようにであったが、3 歳児にとってはそうではなかった。3 歳児では大きな感情の揺

れ動きは見られず、一部の子どもが誇らしげに絵本を持っていることを主張したり、絵本の中のセリフを何度も大声で先取りして見せたのを除いて、大部分はニュートラルな反応を示した。ネガティブ反応を示す子どもも何人かいたが、彼らの怖さはポジティブ反応の子どもたちによってかき消されたようであった。3 歳児にとって、この絵本は繰り返し何度も読み聞かせてもらった絵本であり、その意味で怖い絵本に特有のスリルや緊張を感じにくかったのかもしれない。

最後に、『おばけだじょ』の場面ごとの各反応の推移を Figure 4 にまとめた。1 歳児では前の 2 冊と同様に、全体を通してニュートラル反応が支配的であったが、前の 2 冊とは異なり、ポジティブ反応とネガティブ反応がニュートラル反応を上回る場面が見られた。場面 9 は、最初はおばけのように見えたものが実はかえるであったことがわかり、ほっとしたのも束の間、今度はかえるの後ろに別のおばけのようなものが現れるという場面である。この場面には 1 歳児といえども大きく心を揺さぶられたようであった。この絵本でネガティブ反応を示したのは先ほどと同様の 3 名と 2 歳 2 か月の T (男児) であった。2 歳児では 14 場面中 11 場面でネガティブ反応が他の反応を上回ったことからわかるように、彼らにとってこれは怖い絵本であった。しかし、それは耐えられない救いのない怖さではなく、

怖い絵本を楽しむことの発達

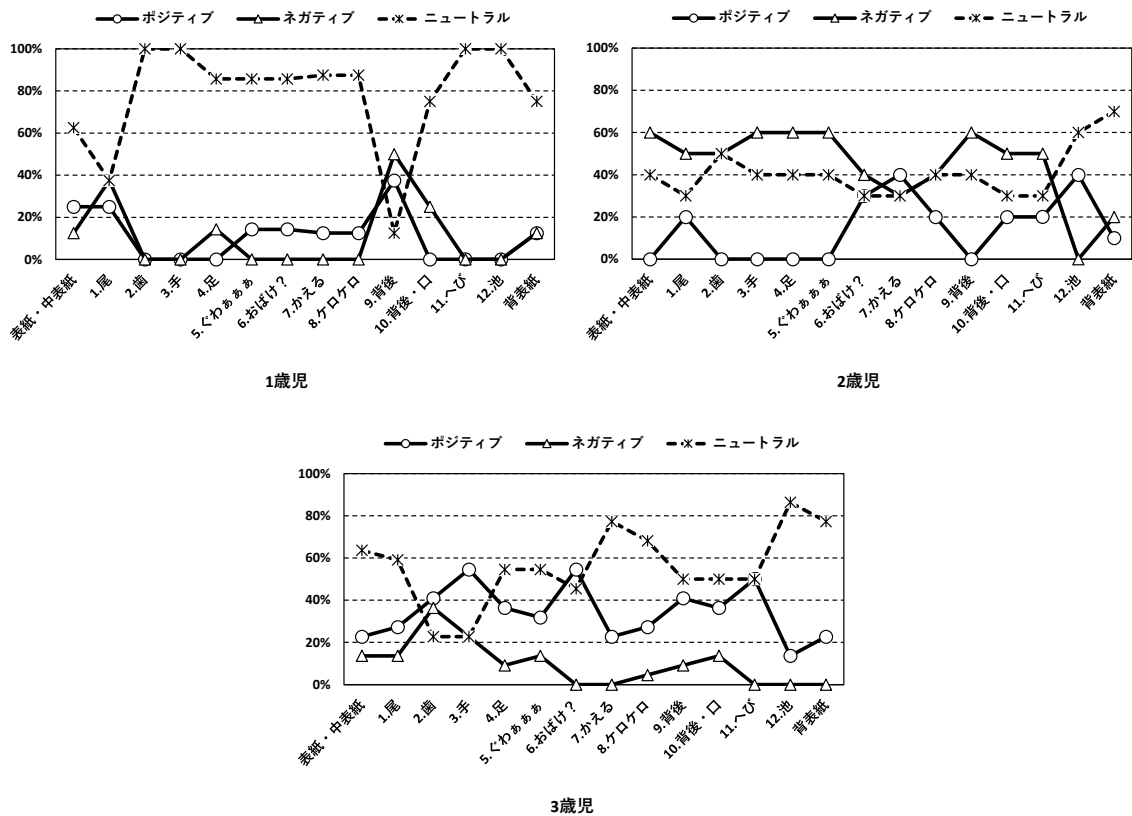


Figure 4 『おぼけだじょ』における各反応の推移

怖さを潜り抜けた先に達成や安堵の喜びが味わえるような怖さであった。得体の知れない何かが実はかえるだったとわかる場面7と、へびに追いかけてかえるが池に飛び込んで何とか助かるという場面12で、ポジティブ反応はネガティブ反応を逆転しており、ここで達成や安堵の喜びを味わっていることが感じ取れる。3歳児の場面ごとの各反応の推移は、さらに興味深いものであった。前の『ねないこだれだ』とは異なり、今回の絵本は彼らにとってあまり馴染みがなく新しいものであり、ゆえにスリルや緊張を感じられるものであった。ここで3歳児が見せた揺れ動きは2歳児の『ねないこだれだ』と類似したものであり、彼らにとってこの絵本は怖さと楽しさの両面を感じさせ、揺れ動きが存分に味わえる絵本のようにであった。

読み聞かせ後の感想とお気に入りの絵本

読み聞かせ後のやりとりの中で絵本に対する感想を求めたところ、1歳児では自発的に述べることは困難であった。しかし、例えば、『びんぼーん』の場面を提示しながら「ここは誰のおうちだった？」と尋ねると、「りす」「かえる」と答えるなど、内容は理解できているようであった。2歳児では、印象に残った場面を次々と自発的に述べる姿が見られ、例えば、『ねないこだれだ』の怖かった場面を尋ねると、「時計が怖かった」「おぼけ怖かった」「ねずみが怖かった」などと答える姿が

見られた。3歳児では、「怖かった」と答える子どもが多く見られる一方で、「怖くなかった」と答える子どもの姿も見られた。例えば、『おぼけだじょ』の怖かった場面を尋ねると、「全部怖かった」「によるによるおぼけ(場面11)が怖かった」と答える一方で、逆に「ぜんぶ怖くなかった」と答える子どもも見られた。

お気に入りの絵本に関しては、1歳児では1名の子どもがすぐに『おぼけだじょ』を指さしたものの、他の子どもは指さしも挙手も見られなかった。2歳児では『びんぼーん』4名、『ねないこだれだ』1名(ただし、『びんぼーん』でも手を挙げる)、『おぼけだじょ』0名であり、どの絵本にも手を挙げなかった子どもが6名いた。3歳児では2冊以上で手を挙げる子どもが複数見られ、『びんぼーん』14名、『ねないこだれだ』11名、『おぼけだじょ』12名であった。このように、お気に入りの絵本の報告の仕方や内容は年齢によって違いが見られたが、特にお気に入りとして怖い絵本が優先的に選ばれるわけではなかった。

怖い絵本に対する反応の事例

最後に、怖い絵本の中でも特に怖がる姿が多く見られた『おぼけだじょ』を取り上げ、それが子どもにどのように受け止められたのかについて事例をもとに考察する。Table 4は、各年齢での子どもの特徴的な事例を示したものである。

Table 4 『おばけだじょ』に対する子どもの反応の事例

クラス	対象児	事例
1歳児	JO (男児) 1歳9ヶ月	表紙のおばけを見た時から、少し不安げな表情を示す。それでも、絵本を読んでいる間、目を背けようとはせず、不安げな表情のままずっと絵本を見続ける。しかし、絵本を読み終わった途端、我慢していたものが溢れたかのように、急に泣き出し始める。絵本について振り返っている時も、保育者を探して抱っこを求めるような姿がある。保育者が抱っこして「怖かったねー」と声をかけると、「怖い」と初めて口にする。しかし、調査を終えて外遊びをするために移動する頃になるとすっかり泣き止み、第2著者に靴を履かせてもらおうと近寄り、元気に外遊びに出かける姿が見られる。
	SY (男児) 2歳5ヶ月	表紙を見てニヤッと微笑み、「おばけ」と小さくつぶやく。場面1でも微笑んだままであったが、場面2から場面5にかけておばけの口が開いたり、手足が生えたりすると少し驚いた表情をし、場面6、7、8でおばけの正体がかえるだと気づくと、絵本を指さしながら「かえ…る、かえる！」と言う。第2著者が「本当やね。かえるやったね」と答えると、嬉しそうな表情を見せる。場面9以降、かえるの背後から新たなおばけが出てくると、再度驚いたような表情で絵本をじっと見つめる。しかし、最後にかえるが池に入って助かるのを見ると、再び安心したようにニヤッと微笑んで、体を伸ばす姿が見られる。
2歳児	TA (男児) 3歳0ヶ月	表紙のおばけを見た途端に「ああ！」と言って顔を手で覆い、絵本を指さして「おばけもう読まない！」と言う。場面1でおばけが出てくると、「うわあー！」と言って椅子の後ろに隠れる。隣に座っていた子も一緒になって椅子の後ろに隠れ、身を寄せ合う。場面8では、おばけがかえるだと分かり、椅子の後ろから顔をのぞかせて少し安心したような表情を見せる。しかし、場面9、10では再び椅子の後ろに隠れ、ちらちらと絵本を見る。場面11でおばけがへびだとわかると、「へびさん」と言い、椅子の後ろから出てくる。最後の場面12になると、「怖かった〜」と言いながら笑顔を見せる。読み聞かせ後に、どの絵本がお気に入りかを尋ねると、すぐに『びんぼーん』を指さす。
	TO (男児) 3歳6ヶ月	表紙のおばけが出ると、すぐに顔を背ける。TAが椅子の後ろに隠れるのを見ると、真似して「隠れるー」と言いながら椅子の後ろに隠れる。その後、椅子の後ろに隠れたり出たりを繰り返す。場面3や場面5では、「うわあ！」と言って怖がっていたが、絵はしっかりと見つめて、セリフも聞いている様子。隣に座っていた女児が怖くなるとTOの腕を掴もうとするが、TOは椅子の後ろに隠れたいのか、掴まれた手を振りほどく。その日の午後、室内の自由時間では『おばけだじょ』をずっと持ち続け、繰り返し読む姿が見られる。
3歳児	KU (男児) 3歳8ヶ月	表紙のおばけを見て「うわあ！（『ねないこだれだ』のおばけより）おっきい」「怖くないもんね〜、KUは」と言い、余裕の表情を見せる。場面1になると、おばけに対してパンチを繰り返すし始める。つられて周りの2、3人の子どもも一緒になってパンチをし始める。場面7でかえるだとわかると「よかった〜」と口にし、笑顔を見せる。場面9で新たなおばけが登場すると、両手を高く挙げて「ぎゃー！」と言いながら笑顔を見せる。そして、今度はおばけに対して銃を撃つ真似をし始める。その後も絵本を読み終わるまでパンチや銃を撃つ真似をし続ける。
	SA (女児) 4歳4ヶ月	両隣の子と身を寄せ合いながら、怖そうな表情をみせる。黒いおばけが描かれている場面では、うつむいて絵本から顔を背けたり、目を細めながら絵本を見たりする。おばけの正体がかえるだとわかる場面7、8や、新しいおばけもへびだとわかる場面11、12では、真剣な表情で絵本を見つめる。読み終わって第2著者が「怖かった人〜？」と尋ねても手を挙げないので、両隣の子が「怖がっていたでしょ」と言わんばかりに挙げさせようとする。続けて「怖くなかった人〜？」と尋ねると、今度は自ら手を挙げる。最後に、お気に入りの絵本を尋ねると、『びんぼーん』に手を挙げていた。

JO (1歳9か月)は絵本の読み聞かせ後に泣き出した唯一の子どもである。特に言葉を発するでもなく絵本を見つめ続けた後、まさに我慢していたものがあふれたかのように泣き出したのだ。このJOに限らず、2歳前後の子どもで構成される1歳児クラスの子どもの多くは、「怖い」という言葉をほとんど発することがなかった。あるものを怖いものとして対象化できるほどには、まだ「怖い」とは何かを十分に理解できていないのであろう。だからこそ、その後に保育者が発した「怖かったねー」の言葉は意味を持つ。その言葉によって未分化で得体の知れなかった対象が分化される得体の知れる対象へと記号化され変化していくのである。そうして腑に落ちることで泣き止み、次へと切り替えていくことができるのではなからうか(詳しい議論は

富田(2008)を参照)。

SY(2歳5か月)も同様に、他の年長の子どもと比べると、まだ怖いものとして明確に対象化されていないのかもしれない。反応はあるもののやや薄く、怖いものと対峙するスリルや緊張は感じていない様子である。怖さを楽しむというよりも、特定の何かに見えていたものが実は別の何かであったというズレを単に楽しんでいるかのようである。

他方、TA(3歳0か月)やTO(3歳6か月)、SA(4歳4か月)は怖い絵本が持つ怖さにはっきりと気づいている様子である。彼らはおばけの表紙を見ただけでそれが脅威の対象であることを読み取って、それを回避すべく顔を背けたり、目をふさいで見ないようにしたり、椅子の後ろに隠れたり、友達と身を寄せ合っ

身構えたりした。それでも彼らは、その種の絵本には怖いものと対峙するスリルや緊張の先に、やがては「大丈夫」「よかった」という幸福感が訪れるよう用意されていることを経験的に知っているのか、怖がりながらもその先の幸福感を求めて目が離せないようであった。まさに怖さに気づいたうえで楽しむことができるようになっている状態と言えるのではなかろうか。

KU (3歳8か月) は、これも面白い子どもである。怖いものと対峙しても「怖くないもんねー」と言い張り、相手をやっつけるべくパンチを繰り返したり、銃を撃つ真似をしたりする。「自分はすごいんだ」と根拠のないイチチョマエの自信を示す3歳児ならではの姿とも言える。パンチや銃も、恐らく彼が日頃の遊びの中で手に入れた恐怖と向き合うために有効な手段の1つである。怖いものと対峙することは勇ましい、誇らしい自分を手に入れたり再認識したりする機会となる。怖くて回避していた子どもでも、絵本という遊びの中で何度か出会ううちに、やがてはそれと向き合い乗り越えていくことができるであろう。怖がっていたTOがその日の午後ずっと怖い絵本を持ち続けていたのも、そうした恐怖克服に向けた心意気の表れとも言えるかもしれない。

まとめ

本研究の目的は、子どもはいつ頃から怖い絵本の怖さに気づき、それを楽しめるようになるのかについて、集団での絵本読み聞かせ場面の観察と分析から明らかにしようというものであった。1, 2, 3歳児クラスの子どもの反応を絵本の場面ごとにポジティブ(微笑む、笑い声をあげる、絵本と関連した発言をするなど)、ネガティブ(「怖い」「いやだ」などと言う、顔を背ける、目や耳をふさぐなど)、ニュートラル(集中して見ているがポジティブもしくはネガティブに偏った表出はなし)のいずれかに分類し、年齢間の違いを比較した。結果は以下のようにまとめることができる。

まず、1歳児クラスでは怖い絵本に対しても全体的にニュートラル反応が多く、怖い絵本を見てそれを回避しようと顔を背けたり、目や耳をふさいだりするネガティブ反応はわずかしか見られなかった。場面ごとの反応の推移も、絵本の展開に沿った揺れはところどころあるものの、全体としてはわずかであった。ゆえに、1歳半から2歳半の子どもの多くは、まだ怖い絵本の「怖さ」に気づくことができず、あまり反応が見られない段階にあると言えよう。もちろん、中には泣き出す子どももいたように、明確に怖さを感じている子どもも存在したが、そこには月齢による偏りはなく、ゆえに発達が関与しているというよりも、むしろ個々の

感受性の問題として捉えた方がよいのかもしれない。

次に、2歳児クラスでは1歳児クラスと大きく異なり、怖い絵本に対してポジティブ反応もネガティブ反応も多く見られ、両者の間を活発に揺れ動く姿が見られた。『ねないこだれだ』のように馴染みのある怖い絵本の場合、その揺れはポジティブ反応に寄ったものであり、これまでに繰り返し読み聞かせてもらった経験からか、怖がりながらもその先にある幸福感を求めて楽しむことができていた。一方で、『おばけだじょ』のように馴染みのない怖い絵本の場合、その揺れはネガティブ反応に寄ったものであり、目の前の脅威に対してただ怖がる姿が多く見られた。それでも、怖い絵本には怖さの先に幸福感が必ず訪れることを経験的に知っているからなのか、怖がりながらもしっかりと見続けて、最終的には「あーよかった」と楽しむ姿が見られた。ゆえに、2歳半から3歳半の時期は、「怖さ」に気づき、それを怖がるようになる段階から、その先にある幸福感を求めて「怖さ」を「楽しめる」ようになる段階への移行期であると捉えることができそうだ。

最後に、3歳児クラスでは2歳児クラスと同様に、怖い絵本に対してポジティブ反応もネガティブ反応も多く見られたが、怖い絵本に対する経験がより増えたためか、2歳児と比べるとその反応はより薄いものとなった。特に『ねないこだれだ』でそれは顕著であり、もはやその程度の怖さではスリルや緊張をあまり感じられず、ポジティブ反応とネガティブ反応の間の揺れ動きもあまり見られなかった。とは言え、子どもはそれなりに楽しさを見出そうとするものである。例えば、絵本の次の展開を読み合う、セリフを先取りして同時に言うなど別の楽しみ方を見つけることで、その絵本をその子なりに楽しんでいた。一方で、『おばけだじょ』の怖さは3歳児にとってほどよいスリルと緊張を与えてくれるものであったのかもしれない。その馴染みのなさゆえに、恐らくそれは彼らにとって先の読めない展開であり、怖さによって生じるスリルや緊張とやがて訪れる幸福感との落差を存分に楽しんでいた。ゆえに、3歳半から4歳半の時期は、たとえ出会う怖い絵本が新奇なものであったとしても、「怖さ」に気づいたうえで、その先にある幸福感を求めて「楽しめる」ようになる段階であると言えよう。

以上のように、本研究では、子どもはいつ頃から怖い絵本の怖さに気づき、それを楽しめるようになるのかという問いに対して、それは2歳半を過ぎた頃からであることが示された。また、怖い絵本を楽しむことは絵本の新奇性によって違いがあることも確認された。

本研究で確認されたような1, 2, 3歳児クラスにおける反応の違いは、恐らくこれまで保育の現場において繰り返し観察されてきたことである。しかし、その

事実は仮に逸話的な事例によって考察はされたとしても、本研究のように同じ絵本を異なるクラスで読み聞かせて、その反応を単に事例として記述するのではなく、1人ひとりの子どもの場面ごとの反応の違いを記録し、各反応の総量を年齢間で比較したり、場面ごとの反応の推移を分析したりした研究はこれまでに見当たらなかった。保育の現場において半ば印象のみで語られてきた事実に対して、実証的なデータを提供した点に本研究の意義を認めることができよう。

とは言え、本研究はいくつかの年齢クラスのある時期の反応のみを取り上げて、それを横断的に比較したに過ぎない。本研究で示された発達の節目としての2歳半という時期も、単に1歳児クラスと2歳児クラスとの区切りの時点を指し示したものである。ゆえに、今後の研究では、ある年齢クラスの1時期のみを取り上げるのではなく、年間を通して数回実施し、異なる時期ごとの変化を詳細に検討していく必要がある。また、今回は1, 2, 3歳児クラスを取り上げたが、今後は4, 5歳児クラスや小学校低学年クラスなども取り上げながら、各年齢クラスでの怖い絵本に対する反応を明らかにしつつ、その楽しみ方や楽しめる絵本にどのような変化があるのかを探っていくことも残された課題の1つと言えよう。さらには、集団での読み聞かせ場面と1対1での読み聞かせ場面との違いを探ることも残された課題の1つである。

文 献

- Bloom, P. (2012). *喜びはどれほど深い?: 心の根源にあるもの* (小松淳子, 訳). 東京: インターシフト. (Bloom, P. (2010). *How pleasure works: The new science of why we like what we like*. London: Vintage Books.)
- 「母の友」編集部(編). (2013). 子どもの好きな怖い絵本. *母の友*, **723**, 50-52.
- Dozier, Jr., R. W. (1999). *恐怖: 心の闇に棲む幽霊* (桃井緑美子, 訳). 東京: 角川春樹事務所. (Dozier, Jr., R. W. (1998). *Fear itself: The origin and nature of the powerful emotion that shapes our lives and our world*. St.

Martin's Press.)

- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1987). *表情分析入門* (工藤力, 訳編). 東京: 誠信書房. (Ekman, P., & Friesen, W. V. (1975). *Unmasking the face*. New Jersey: Prentice-Hall.)
- Jersild, A. T. (1974). *ジャーシルドの児童心理学* (大場幸夫・斎藤謙・沢文治・服部広子・深津時治, 訳). 東京: 家政教育社. (Jersild, A. T. (1968). *Child Development (5th ed.)*. New Jersey: Prentice-Hall.)
- 小林真. (1997). 集団場面における絵本の読み聞かせと幼児の反応: 年齢・性差と材の位置による影響について. *児童文化研究所所報*, **19**, 1-13.
- 佐々木宏子. (1989). *絵本と想像性: 3歳まえの子どもにとって絵本とは何か*. 東京: 高文堂出版社.
- 田代康子. (2001). *もっかい読んで!: 絵本をおもしろがる子どもの心理*. 東京: ひとなる書房.
- 富田昌平. (2008). 「怖いけど見たい」「怖いけど楽しい」ってどうして? *現代と保育*, **71**, 128-143.
- 富田昌平. (2016). 2歳児クラスにおける想像上の怖いものを楽しむ遊び: その展開過程と保育者の働きかけ. *心理科学*, **37**, 21-30.
- 富田昌平. (2017). 幼児期における恐怖対象の発達の变化. *三重大学教育学部研究紀要 (教育科学)*, **68**, 129-136.

付 記

本論文は、第2著者による三重大学教育学部2021年度卒業論文で得られたデータを再分析し、新たに論を展開したものです。調査にご協力いただいた幼稚園・保育園の先生方及び園児の皆さんに深く感謝申し上げます。また、本論文は着想において岩附啓子氏(元津市立保育園保育士、元三重大学教育学部非常勤講師)から多くの示唆をいただいた。記して感謝の意を表します。最後に、本論文は執筆にあたり、令和2年度科学研究費補助金・基盤研究(C)(課題番号:20K03364)の助成を受けた。